富士山で知る「秋」

一字一筆　静岡の今

秋は、身の回りで自然が大きく変化する季節である。その自然界の変化を五感で感じ、人はそれぞれに「秋」を知る。

私の「秋」は、澄み切った空の向こうに新雪で化粧した富士山を見たときである。その瞬間、心で手を合わせ、言葉はない。

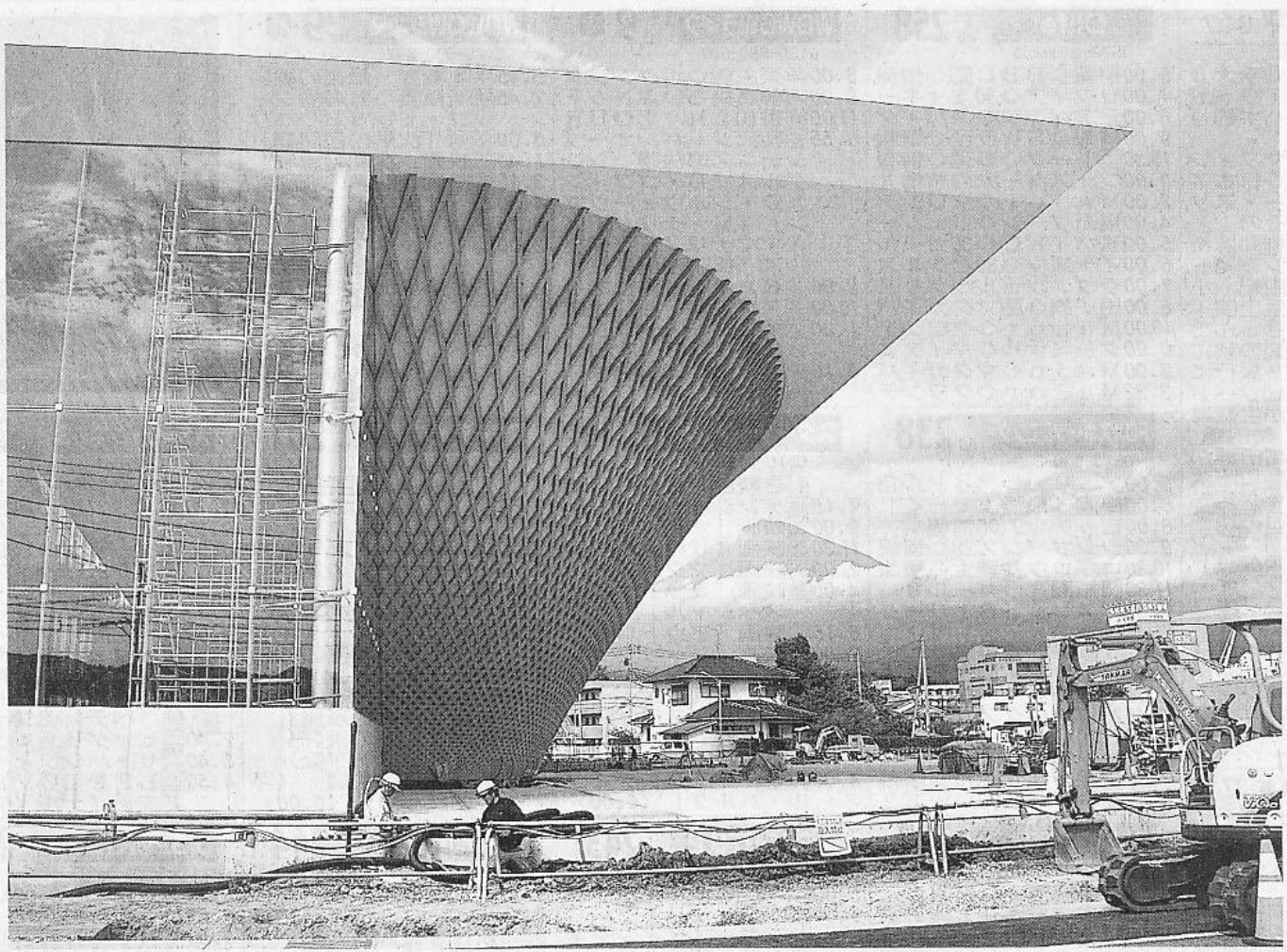
今夏も、その富士山を舞台に様々なドラマがあった。環境省の集計によれば、今夏の富士登山者数は28万4862人で、前年より16・0％増えた。静岡側3ルート（富士宮、須走、御殿場）は前年より約1万8千人増の11万2205人と、3年ぶりに10万人を超えた。仲間に助けられて、見事に山頂に立った身体障害者がいた。外国人登山者も急増した。その一人一人が、この山に忘れがたい人生の一瞬を刻んで行った。

残念な出来事もあった。須走口本7合目付近の登山道で、登山ルートとは違う方向を示す矢印が岩石など約50カ所に描かれていた。誘導先には危険箇所などもあり、除去作業に1カ月以上もかかった。誰が、何の目的でやったのか。「世界遺産」の名峰を汚す行為だった。富士山入山料（保全協力金）の協力率も48・2％で、目標（70％）に達しなかった。

光明もある。富士山の文化的価値を調査研究し、内外に広める情報発信拠点として県が富士宮市に建設を進めていた富士山世界遺産センターが10月中には完成し、12月23日のオープンを目指す。

富士山を見守る甲府地方気象台によると今年の初冠雪は、10月6日現在まだない。平年は9月30日だが、昨年は10月26日で、観測史上最も遅かった。気象観測にスーパーコンピューターが活用される時代に初冠雪は、気象台職員による「目視」で決まる。1894（明治27）年からシーズンには24時間態勢で続けられ、今年で123年になる。「富士山」とは、そういう山である。

（前静岡県監査委員・富永久雄）



「逆さ富士」の木組みが姿を現した富士山世界遺産センター＝富士宮市、全日写連・渡辺行庸さん撮影